

2 イチゴセル苗のランナー挿し育苗と横植えによる花房伸張方向の斉一化

ねらいと成果

セル苗は培地量が少なく軽量であるため、培地充填、運搬、定植等の作業が大幅に軽減され、育苗面積も小さい。したがって、葉菜類を中心に急速に普及しており、果菜類でも研究が進んでいる。イチゴでも最近様々な育苗トレイが開発され、実用化の方向にあるが、従来の育苗と異なり密植条件であるため、簡便な作業体系が求められる。

そこで、仮植時にピン等を用いず苗を安定的に固定するため、ランナーを支持軸として培地に挿す育苗法（以下「ランナー挿し育苗」という。）を考案した。また、従来は定植時に花房の伸張方向を揃えるためランナー軸を目印にしていたが、横植えによりランナー軸の方向とは無関係に花房が斉一に伸張することを明らかにした。

内容

1. ランナー挿し育苗

一般に、イチゴの仮植作業ではランナー軸を2～3cm残し、これを目印としてランナー軸の反対方向へ倒すように仮植する。ポット育苗では苗が抜けないようにU字型のピン等で固定する。セル苗では培地量が少ないので、ピンでは固定しにくいいため、ランナー軸を培地に垂直に差し込みランナーを固定するランナー挿し育苗について検討した（図1）。ランナー軸を培地に差し込むと必然的に苗は一定方向に倒れた状態になり、活着するとランナーは反り返って立ち上がる。ランナー挿し育苗で育成した苗の生育は、慣行挿しの苗と遜色ない（表）。

2. 横植えによる花房伸張方向斉一化

イチゴ栽培では収穫作業を円滑に行うため、花房の方向を一定にすることが重要である。従来、親株から伸張したランナー軸の反対側に花房が出現する

性質を利用して苗の定植方向を決定していた。実際には育苗中に軸の位置が分からなくなることもあったので、ランナー軸の方向と植え方の関係を調査した。この結果、横植えすることによりランナー軸の位置とは無関係に花房が一定の方向に伸張することが明らかになった（図2）。横植えによりランナー軸が培地中に入っているランナー挿し育苗においても、花房の伸張方向を斉一化することが可能となった。

今後の方針

横植え法はやや深植えになりやすく、実際にはやや斜め植えとするのが望ましい。将来は機械植えを前提として、あらゆる角度に苗が傾斜することを想定しておかねばならないので、斜め植えの角度についても検討していく。

小林 保（中央農技・園芸部）

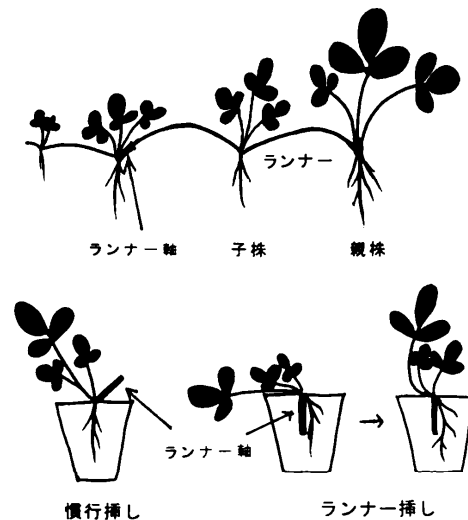


図1 ランナー挿し育苗と慣行育苗の比較

表 ランナー挿し育苗と慣行挿し育苗の苗質比較

挿し方	葉長 (cm)	葉柄長 (cm)	クラウン径 (mm)	生体重	
				地上部 (g)	地下部 (g)
慣行挿し	6.3	13.0	7.3	6.7	3.8
ランナー挿し	6.5	13.0	7.2	6.9	4.1

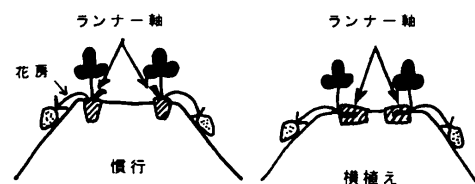


図2 植え方と花房伸長方向との関係